

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」（マルコ5：41）

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第26号

2016年3月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者：大岡左代子

橋渡しの役割を

大阪教区主教 アンデレ磯 晴久

イエスは、娘の手を取り、「娘よ。起きなさい」と呼びかけられた。
すると娘は、その霊が戻って、すぐに起き上がった。（ルカ8：34・35）

2015年11月12日の朝日新聞デジタル版に、とても素敵な記事がありました。少し長い引用になりますがお赦してください。

「壁と向き合う橋—武蔵野美大と朝鮮大学の学生ら制作—壁は確かにそこにある。でも、向こうにいる相手と対話したい—。東京都小平市にある武蔵野美術大（武蔵美〈むさび〉）と、隣接する朝鮮大学校（朝大）。両校の学生らが、敷地の境界にある一枚の壁に「橋」を架けるアートプロジェクトを完成させた。… 橋は木製の階段状で、コンクリートの壁の両側に制作。両校での合同美術展“突然、目の前がひらけて”の期間中、橋を渡り双方の会場を行き来できる。武蔵美のA教授、同校の卒業生を含む学生3人と、朝大の学生2人が企画した。朝大は、在日朝鮮・韓国人の子弟への教育を行っている。“一緒に橋を作る中で、日本と在日社会を隔てる壁とは何か、皆で対話し考えたかった”と武蔵美メンバーのHさん（25）は話す……」。

若者たちの感性のすばらしさに、わたしは深い感動を憶えました。話し合いの中では、壁を取り除こうという声もあったそうですが、壁はある、民族、歴史、文化など、確かに壁はある、それよりも橋を架けようという提案が朝鮮大学校の女子学生からあったといえます。

今世界は、対立と排除、排外的な動きが強まっています。アメリカ大統領予備選挙でも、声高に「壁を作ろう」という主張に、歓声が挙がっています。本来、神と人、人と人、人と生きとし生けるものすべてをつなげる働きをするべき宗教が、テロや争い、排除の正当化に利用されています。このままでは、本当に第3次世界大戦に突入するのではないかと、わたしは恐れを抱きます。死の支配する世界に突き進んで行くのではないかと心配です。今大切なのは、若者たちが示してくれた対話と異質なものを何とかして理解しようとする心です。

わたしたち聖公会は、「ブリッジ・チャーチ」（橋渡しの教会）という良き自負心を大切にしてきました。混迷を深めるこの世界にあって、わたしたちの果たすべき役割は大きいのではないのでしょうか。

タリタ・クム（マルコ5：41）のルカ8章の並行記事では、イエスは、亡くなった娘を前に、泣き悲しむ人々に対して、娘は眠っているだけだと言われ、「娘よ、起きなさい」と呼びかけられます。すると娘に霊が戻り、娘は息を吹き返し、起き上がります。霊「ルーアッハ」は、人を生かす命の息です（創世記2：7）。

今世界は死の力に牛耳られています。イエスの命の息が吹きかけられ、世界が命を受けて、息を吹き返し起き上がるように、共に祈り働きましょう。



教役者 コーナー

「“当たり前”？ 思い込みにだまされないで…」

聖職候補生 セシリア 下条知叻子

私が最初にセクシュアル・マイノリティという考え方を意識させられたのは聖公会神学院在学中、ある年の特別学期の学びの中であった。グループでテキストを読んだり、マイノリティとしてのアイデンティティをカミングアウトしておられる牧師さんの講話を伺うこと等を通して様々のことを知らされた。性というものが生物学的にも社会的にも、女の～あるいは男の～という2つの在り方にきっちり別れ得るものではなくグラデーション的に存在しているということ。マイノリティであるがゆえに苦しみを覚えている人が私の想像よりずっと多くおられるということ。それまでわたしの中にあつた性というものに対する男女二元論的な考え方は、学校や社会の中で教えられ、刷り込まれ、（それをわたしたちに教えた人に悪意はないにせよ）そういうものだと思いこまれてきたに過ぎず、それははっきり言って間違いであったということを知って衝撃を受けた。

わたしの経験の中から小さな例を挙げてみよう。小学校に入学した当初、男子は女子に対しては「～さん」、男子に対しては「～君」と呼ぶように、女子は女子に対しても男子に対しても「～さん」と呼ぶようにと指導された。このことはいやでも「あなたは女の子」「あなたは男の子」という観念を意識させるものであつたように思う。幼い私は、一抹の違和感を持ったものの、担任教員の指導に従っていた。もし誰か「なぜですか」と尋ねたり「いやです」という応答をしたら、担任教員はどのように対応していただろうか。もう40年以上前の話であるからさすがに現在はそのような事例はないだろうと思うのだが、セクシュアル・マイノリティということが意識化されている今でも、「あなたは女」「あなたは男」と押し付けられるような事柄は、社会や学校の中にも山ほどあるように思われる。

これが当たり前。それはそういうもの。わたしたちが勝手に思い込んだり、決めつけてしまったりすることのいかに多いことか。そしてそのような考えの押しつけによってわたしたちは、誰かを傷つけたり苦しめたりしてはいないだろうか。

あなたとわたしは違う。違って当たり前。それを受け止め合いたいけれど難しい。人間にとっては難しいそのことを、イエスさまはいつだって当たり前やっつけてのけておられるのだろう。マイノリティかマジョリティかなどと言う前にそのままの姿を受け止め合える。そんな御国が来ますように！

平和の旅

「南京を考える旅」に参加して

福井聖三一教会 篠田茜



南京利済巷慰安所旧跡陳列館

2月26日から3月1日まで、中国YWCAと日本YWCAが4年に一度共催する平和プログラム「南京を考える旅」に参加してきました。日本の地域YWCAから15名が参加、中国からは南京以外に西安、北京、天津、上海、武漢、成都、杭州、厦門から参加、総勢約40名の参加者でした。日本の15名のうち10代、20代が10名、中国側も約2/3がユースで、これからの世界を担う若者たちへの希望と願いが込められたプログラムでもあります。

上海同济大学の蔡建国教授の「中日関係の現状及び民間組織の責任と役割」、上海師範大学の蘇智良教授の「“慰安婦”歴史の真相」というふたつの講演、侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館（南京大虐殺記念館）、南京利済巷慰安

所旧跡陳列館（旧慰安婦館跡地）、南京国際安全区をつくり南京市民を受け入れ保護した外国人の中心となったジョン・ラーベの旧居などの見学、夜はグループに分かれて感想を分かち合い、最終日に各グループから「平和行動プラン」を発表するというのが主な内容でした。

中国のクリスチャン事情を垣間見たり、もと神学校を訪れたりなどいろいろと興味深いことがありましたが、ここでは訪問場所を通して感じたことを中心に記してみたいと思います。

南京大虐殺記念館で見た何層ものいびつになったままの人骨、殺されたときに使われたという錆びた10センチ前後の鉄釘、生存者の証言など、苦しくなる展示でいっぱいの中、日曜ということで中国各地からの人たちに囲まれて、いつ抗議されたり暴力を振るわれたりしてもおかしくないのではないかという気持ちに襲われました。家族や友人とそれぞれの暮らしを営んでいた人々が、わけもわからず突然その生活、人生、命を絶たれてしまったこと、次は自分の番だと思いながら家族が燃やされ、切られ、レイプされるのを目にしていた人たち、その気持ちを思うと、人間の暗部を見る思いで暗澹たる気持ちになりました。旧慰安婦館は南京大虐殺記念館別館として2015年12月に開館したばかりのもので、おもに高級軍人対象の“慰安婦”館です。「東雲楼」、「故郷楼」などの名のついた慰安所の置かれた一角が整備され公開されています。慰安婦の多くは北朝鮮出身者ですが、中国などの出身者もあり、約200人がいたということです。入口には「～子」のような日本名が書かれた木の札がかけてありました。一部の慰安婦に対してだけだったのかもしれませんがまたいわゆる「源氏名」だったのかもしれませんが、朝鮮での創氏改名と同じ「名前を変えさせる」行爲があったという事実を知りました。

占領される側にいる人間であることだけでなく、女性であることで負わされた二重の苦しみ、戦後もその事実を隠して生きることを強いられた悲しみに少しでも寄り添いたいと思いながら、慰安婦館をあとにしました。

現在日中は政治的に厳しい状態が続いていますが、双方のユースたちがお互いに言葉や国籍などの壁をらくらくと越えて、どんどん親くなる様子はとても心暖まるもので、分かち合いの場での

涙あり笑いありの姿には感動しました。

同時にもはやそれほど純粋にすべてを受け止めきれない自分にも気付いたわけですが、大人の役割は「事実を次世代に伝える」こと、「人が人を大切にする姿をみせていく」ことに尽きるのではないかと思います。

最後に中国の若者の言葉を紹介したいと思います。「今回の活動は若者の代表が増えました。お互いに平和の領域に共通認識がありました。そして平和な世界を建設するという信念を確固たるものになりました。“南京 平和を考える旅”、ただ平和な行動を開始するだけです。若者は正しい歴史観を樹立すべきです。平和の理念を実行します。平和の使者になります。平和の理念を実践に運用します」。

講演会報告

「ストップ! 女性や子どもへの暴力— 子ども買春^{かいしゅん}、子どもポルノなどの問題から考える—」

木川田道子 (管区女性デスク/田辺聖公会信徒)



京都YWCAにて/講演会の様子

11月6日、京都YWCAのホールを会場に標題の講演会を開催した。(主催/管区女性デスク、正義と平和委員会ジェンダープロジェクト。共催/京都YWCA、京都教区宣教局社会部、ハラスメント防止委員会)

毎年この時期、国際聖公会女性ネットワークなどの呼びかけに連帯して行っている「ジェンダー暴力と闘う16日間キャンペーン」(性差別と結びついた主に女性と女兒に対する暴力の根絶を目指す)の一環でもあった。講師は、子どもの商業的性搾取問題(児童買春・

児童ポルノ・性目的の人身売買)に取り組むECPAT/STOP子ども買春の会共同代表の斎藤恵子(さいとうけいこ)さん。

現在、世界中で2700万人が人身取引の被害に遭っており、その被害者の約7割が女性、約3割が子どもだと言われている。実は日本も無縁ではない。

講演では、ここ十年増える一方の日本での被害の実態(昨年の児童買春の摘発件数661件。児童ポルノ摘発件数は1,828件で過去最高)、言葉巧みに誘うスカウトマンやプロダクション・動画配信会社・AV販売店など複数の業者が介在するAV産業の仕組み、「契約書」の問題性(撮影内容の過激さに気づいて出演を拒否しても、巧妙に作られた契約書により莫大な違約金を請求されることがある)、強制わいせつや強姦が親告罪であること等、日本の加害する側の「野放し」的状況や、各国の防止の取り組みなどが報告された。米国国務省が今年7月に公表した人身売買報告書には「日本はJK(女子高生)ビジネスが買春の温床となっている」と指摘されていると言う。ネットに出回った画像の削除は困難だ。被害に遭った子どもたちは誰にも言えない苦しみから逃れるためリストカットや拒食症、薬物依存に陥ってしまうこともあると言う。斎藤さんは「児童ポルノはファンタジーなんかじゃない。性被害は“魂の殺人”。被害者は名乗りでることが怖い。だから周囲が声を上げなければ。」と話された。質疑応答では「犯罪性は明らかなのになぜ取り締まれない

のか)、「問題の根っこにあるジェンダーの意識を変える必要がある」等の意見が出た。

北アイルランドでは買春を処罰化、売春を不処罰化したという。つまり売春する側でなく買春する側に焦点を当てたというわけだ。既存の枠組みの中で現状を変えていくのではなくパラダイムそのものを変えていくことの重要性が語られ、共感した。

今回、参加者が14名と少なく広報不足を反省する次第。ぜひECPATの活動に関心を持っていただけたらと思う。なお会場の京都YWCAは教区センターのすぐ近く。多彩な活動をしておられて、地域における教会の働きを考える際に個人的に多くの点で参考になった。すてきなカフェもある。お時間ある時に立ち寄ってみられては。

(2015年12月発行 京都教区報 つのぶえ681号より転載)

■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑬ ■ ■ ■ ■ ■

～ 代表的なセクシュアル・マイノリティ～

中部教区 司祭 アンブロージア 後藤香織

以下に、前回見たセクシュアリティ3要素別に、代表的なセクシュアル・マイノリティを見てみましょう。

■身体的性別の非典型・性分化疾患

まず、医療分野や医師によって見解相違があり、決定的な定義はありませんが、生物学的に典型的な男女と異なる身体的な特徴を持つ人たちが存在しています。最近までインターセクシュアルとも呼ばれていた、性分化疾患 (disorders of sex differentiation) の人たちです。しかし、「性分化疾患」という単一の疾患があるわけではなく、アンドロゲン不応症や先天性副腎皮質過形成、卵精巢性性分化疾患、クラインフェルター症候群、ターナー症候群など、身体的性別に関する様々なレベルでの、約60種類以上の症候群・疾患群を包括する用語です。身体的性別といっても、性染色体の構成、性腺、内性器、外性器、二次性徴の性、など様々な場合があり、これらの身体的性別にかかわる非典型的な特徴に関するものです。すでに見たように、厳密には、生物学的性の実態は、女性と男性を両極としたスペクトラムで、その両極に多数の人が集中しています。ここでは、代表的なセクシュアル・マイノリティとして紹介していますが、既出のように当事者の中では、自分たちの状況をセクシュアリティの問題ではなく、「障害」として捉えて医療の高度化を望む声が多

いそうです。

ですので、身体的性別に関する非典型的な特徴を持つ人々については、セクシュアル・マイノリティとは、別に考えていただく方が良いのかもしれない。

■性的自認の非典型・トランスジェンダー

つぎに挙げるのは、性的自認の非典型的なケースです。

性自認も生物学的性と同様に、女性の自認と男性の自認を両極としたスペクトラムです。

身体的性別が、女性の場合、性自認も女性、身体的性別が、男性の場合、性自認も男性というのが典型的ですが、身体が女性であるが、性自認男は性、反対に身体が男性であるが、性自認は女性である状態を、トランスジェンダーと呼びます。広義にはトランスセクシュアル(TS)、トランスジェンダー(狭義)、トランスヴェスタイト(TV)の総称で、自分の生物学的性別に違和感を持ち、何らかの形で社会的性別(ジェンダー)の越境を試みる人のことです。狭義ではトランスヴェスタイトやトランスセクシュアルと区別して、体のつくりにはこだわらないが、生物学的性とは異なる性自認に即したライフスタイルで生きることを重視する人をトランスジェンダーと呼びます。最近では、女性・男性にこだわらず、多様なジェンダーを自分の主体的な選択で、自由に生きていこうと

いうあり方を示す言葉としても用いられることがあります。また、トランスジェンダーが、性別二元論を前提に、その越境を意味するニュアンスを持っているため、既存の性別観に捕らわれる囚われない生き方をする者の総称として、ジェンダークィア/Genderqueer という用語も提唱されています。

日本でよく用いられる「性同一性障害/Gender Identity Disorder」は、病名であるためこの言葉を嫌う当事者も多く、海外では医療の現場以外で一般的に使われることはありません。

また、「ニューハーフ」という和製英語が、1980年頃から使われ始めています。元々の使われ方とは、異なりますが、現在では、女装した男性あるいは性別適合手術をした元男性等、生物学的男性が女性化して、特に接客業（ホステス）、ショービジネス等に従事する場合に、この呼称が用いられています。「ニューハーフ」を自称する当事者以外の MtF トランスジェンダーには、使わないで欲しい言葉です。

■性的指向の非典型・同性愛者

3番目に、性的指向の非典型では同性愛者を取り上げます。同性愛者とは、性的指向が同性に向かう人です。繰り返しになりますが、趣味として選択する嗜好や自分で決定する志向ではありません。（ただし、同性愛の運動の中では、あえて嗜好や志向を使う人もいますので注意が必要です。）性的指向もやはりスペクトラムです。同性愛が「病気」と規定されたのは、1869年にハンガリーの医学者ベンケルト/Benkert が提唱したのが始まりです。このときに同性愛（Homosexuality）と異性愛（Heterosexuality）という言葉も作られました。ベンケルトは宗教的に「罪人」とされていた同性愛者の地位確立のために「病気」と規定したのですが、その後「病気」とされたために「異常」「倒錯」「変態」というレッテル貼りが行われ、研究の対象になってしまいます。最近までキリスト教界では、同性愛者を

矯正し、異性愛者に治そうとする団体が多くありましたが、アメリカ精神医学会は、1973年に同性愛を精神疾患のリストから外し治療の対象外としています。また、WHOも、1990年に「同性愛は精神疾患ではない」とし、1992年の「国際疾病分類(ICD:International Classification of Diseases)」の第10版で、「同性愛はいかなる意味でも治療の対象とはならない」と宣言しています。

日本では1995年1月になってやっと、日本精神神経医学会が、上記の国際疾病分類 ICD を尊重するという見解を発表して、同性愛を治療の対象から外しています。

厳密な調査は人権侵害になるため行われませんが、同性愛の人の割合は、少なく見積もっても、民族や国、地域に関係なく人口の3~5%といわれています。これだけ高い割合で、同性愛の人がいるにも拘わらず、目に見えない存在とされているのは、社会的な偏見がそれだけ大きいことを表しているといえるでしょう。「世界がもしも100人の村だったら」(マガジンハウス)では、「90人が異性愛者で、10人が同性愛者です」と記されています。

以上、代表的なセクシュアル・マイノリティーを概観しましたが、わたしたちの社会は女と男のいずれかに分けられる男女二分法の社会です。しかし、それは社会が制度として作り出している枠組みであることを、まず認識していただきたいと思います。そして「異性愛が当たり前で同性愛は『異常』」「人間は男か女のどちらかしかない」という思い込みや偏見が、典型的な性別の枠組みに入らない人々にとって、どれほど無神経な対応を生み出しているのかを考えてみていただきたいと思います。

折角、神さまは多様で豊かな人間の“性”を、わたしたちに与えてくださっているのに、わたしたちの乏しさが、豊かな人間の“性”を乏しいものにしてしまっているのではないか、そんな気がしてなりません。





「レズビアン」という生き方～ 多様な性・多様な愛 ～



2009年8月に、大阪聖パウロ教会にて公開学習会「わたしの瞳にうつる風景 ～性同一性障がい者の声～」を行って以来7年振りのセクシュアル・マイノリティー（LGBTI）について学ぶ学習会となります。この出会いを通して、少しでも多くの人とともに多様な性や愛の在り方を考える機会となることを願っています。多くの方の参加をお待ちしています。

日時：2016年4月23日（土）13：30～15：30 参加費無料 講演終了後お茶会（終了16：00）

場所：日本聖公会大阪教区 大阪聖パウロ教会 〒530-0013 大阪府大阪市北区茶屋町2-30

講師：堀江有里（ほりえゆり）さん

主催 日本聖公会正義と平和委員会ジェンダープロジェクト/日本聖公会女性に関する課題の担当者

共催 日本聖公会 人権問題担当者/大阪教区宣教部 社会宣教委員会/中部教区宣教局 社会宣教部/
京都教区宣教局 社会部

*セクシュアル・マイノリティー/LGBTIとは、

L(レズビアン)、G(ゲイ)、B(バイセクシュアル)、T(トランスジェンダー)、I(インターセックス)

*性的指向や性自認に関して自らを表現するために人びとが使う言葉はさまざまです。人びとを一つのアイデンティティにまとめたり、固定したり差別したり、また多様性を無視しようという意図はありません。



女性デスクから



◇春3月、国連女性の地位委員会(UNCSW)/ACC 代表団会合のシーズンとなりました。第60回(3月14日～24日)の今年は福澤真紀子さん(東京教区/現在福島在住、昨年の派遣者)と上澤伸子さん(東京教区/リグリマ・ジャパン代表)のお二人が参加しておられます。今年の優先テーマは「女性のエンパワメントと持続可能な開発の関連性」、レビューテーマは「女性及び女兒に対するあらゆる形態の暴力の撤廃及び防止」です。ミレニアム開発目標(MDGs、目標年2015年)の後を引き継ぐ目標として持続可能な開発を目指す「SDGs」が昨年採択され、これから15年間の大きな目標となりました。「誰も置きざりにしない」をキーワードに MDGs の積み残した課題や今ある課題に取り組むことになっています。今年は日本聖公会代表チームが初めて現地で「パレルイベント」(テーマ:いのちと環境をまもる一放射能の脅威にさらされている福島的女性とバングラデシュ災害常襲地域の少数民族女性をつなぐ)を開催しますので、次号での報告を楽しみにお待ちください。

◇2015年5月より「日本聖公会女性団体連絡協議会」として国際婦人年連絡会に加入し、木川田が平和、吉谷が環境の分野別委員会に参加していますので、その活動についてもあらためて紹介したいと考えています。



ジェンダープロジェクトより



2002年、正義と平和委員会の中に、ジェンダー部門が置かれるようになって以来14年。日本聖公会における「ジェンダー平等」は進んできたでしょうか？教会での性別役割分業は？教会委員、教区会代議員、総会代議員の女性の割合は？女性が聖職志願しやすい環境は？女性の聖職はどのように扱われているか？等々、教会の現実を見渡せば、劇的に「ジェンダー平等」にむけての環境が変化したとは言い難いと思うことがしばしばあります。今、人気の朝の連続ドラマで、女子教育や女性の社会進出の必要性を説く主人公に対して、従業員が言いました。「そんな意識改革は永遠に無理です」と…。もちろん時代背景がありますが、言い得て妙？(笑)。永遠とは言わなくても、意識改革というものは、本当に時間がかかるものだと思います。今でも「ジェンダー」という言葉を聞くだけで、嫌悪感をもたれることがあります。そこには、厳然とした「男女二元論」に基づいたジェンダーバイアスがあることを感じます。2015年の日本のジェンダーギャップ指数(世界経済フォーラムが発表する男女の格差を数値化したもの)は世界第101位。特に、経済活動への参加と政治への参加が低い数値です。わたしたちの教会でも、意思決定機関への女性の割合、また財政担当者の女性の割合をみれば、日本社会と同じ傾向にないでしょうか。意識改革にはまだまだ時間がかかるかもしれません。特効薬ありません。が、あきらめないこと、立場の違う人ともよく話すことが大切だと感じたこの14年間でもあります。不正な裁判官に訴え続けたあのやもめのように、これからも「ジェンダー平等」を伝え続けたいと思います。

** 編集後記 **

しばらく掲載していなかった、下記の表記を復活しました。活動や課題が多岐にわたって広がっていても、常に原点に立ちかえることを忘れないようにしたいものです。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるという考え方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3~4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。